

1 単元名 しらせたいな，見せたいな

2 単元の目標

- (1) 生き物や見つけた物について，形体や事柄を観察して書くことができる。 (書くこと)
- (2) 主述の整った文を書くことができる。 (言語事項)
- (3) 句読点に注意して文を書くことができる。 (言語事項)

3 単元について

(1) 教材について

<文章を書く基本的言語技術の習得>

1学期に，主語・目的語・述語からなる短文を書く学習を行った。まとまりのある文章を書く学習は，この単元がはじめてとなる。文章の構成単位は文である。正しい文を書く基本を習得するために，次の言語技術を身に付ける。

主語と述語が対応する文を書く。

助詞を正しく使う。

句読点を打つ。

<論理的思考の初期段階としての作文>

学校で育てている生き物や学校で見つけたものについて，身近な人に伝えるために，観察して文章に書く教材である。児童は，学校生活の中でさまざまな体験をする。体験を通して思ったことや感じたことを伝えたいという意欲を持つ。伝えたい事柄や気持ちを口頭で伝えることは比較的抵抗なくできるが，一年生は文字を使って書く技術や方法が身に付いていない。

この単元で，観察して文章に書くための基礎的な方法を身に付ける。観察して文章に書くとは，色・形・大きさなど，物の形体や事柄を具体的に表現することである。これは，具体的事例を詳細に書く力へとつながる。複数の具体的事例から共通性を導き出す論理展開の初期段階としてとらえることができる。

(2) 児童の実態について(8名)

<観察作文の実態調査から> (10月7日実施)

- 1 方法 一人一人に異なった人形を提示する。
2年生に伝えるために，人形について文章を書かせる。
- 2 テーマ 「おしえてあげよう」
- 3 児童の作文

番号	字数	文の数	句点もれ	読点の数	色	形状	大きさ	触感	服装	身体
1	47	4	4	0						
2	62	5	0	0						
3	71	4	0	0						
4	72	6	0	0						
5	109	6	0	0						
6	112	10	1	6						
7	112	7	0	0						
8	124	9	0	4						

調査の作文においては，主語と述語がねじれている児童はいなかった。これは，文中の修飾語が短く一文も短いこと，対象の人形の服装や色が特徴的だったことに起因する。

助詞の「は・を・へ」の表記が正しくできる児童は，5名である。3名は，表音通りに表記してしまう傾向がある。文末に句点をつけるという技能が身に付いていない児童が1名，読点を全く使わないで表現する児童が6名いた。読点の付け方に明確な規則はないが，1年生では主語の次につけることを指導する。

対象の特徴を観察する際，ほとんどの児童が服装や色に着目している。視覚情報として直接入力しやすく，文章で表現するときに容易であるからと考えられる。形，大きさ，触感で表現した児童は少

なかった。形や大きさは比喩的に表現しなくてはならない。語彙量が少なく文章を書くことに慣れていない一年生には、言葉に置き換えることが難しい視点であると考えられる。

(3) 指導にあたって

<主語と述語を対応させるための手立て>

知らせたいものの絵をカードに描き、絵を手がかりに観察したことを書き込んでいく。カードには、述語にあたる単語や極めて短い文が書かれる。この書き込みを「文」にすることは、簡単ではない。「なにが」「どこが」にあたる主語が文字化されていないからである。一年生は文字を駆使して思いを確かに表現することがなかなかできない。このような実態から、「文」に書く前の段階として、口頭作文を行う。カードを見ながら、主語を明確にした文を口頭で表現する。口頭作文がすらすら言えるようになったら文に書くことに移る。

<助詞や句読点を正しく表記するための手立て>

視写と聴写を日常的に取り入れる。授業時間以外でも、視写と聴写を組み合わせノートに書き取らせる活動を多く行う。本単元の学習では、教科書の例文を視写する。授業の初めに、「は」「を」「へ」の表記を意識した単文を聴写させる。

<観察の観点を増やし分かりやすく描写するための手立て>

児童は、「はじめ」「なか」「まとめ」の文章構成にしたがって、三文形式のスピーチを朝の会で行っている。ほとんどの児童は体験したことや感想を抵抗なく話せるようになってきた。この単元の作文では「はじめ」「なか」だけの構成にする。色や形などを観察した文章から「まとめ」に当たる感想を導き出すことはできないからである。

基本的な文章の型を以下のように示す。

「はじめ」---- しらせたいもの	学校に、	<input type="text"/>	がいます。
「なか」----- かんさつしたこと	<input type="text"/>	は、	～ です。
	<input type="text"/>	は、	～ です。
	<input type="text"/>	は、	～ です。
	<input type="text"/>	は、	～ です。

観察カードに観察したことを書き込む際に、色・形・大きさ・さわった感じ・動きなどに目を向けさせる。

4 指導及び評価計画 (8時間扱い 1 本時)

次	時	学習のねらい	評価			努力を要する児童への手立て
			観点(評価方法)	おおむね満足できる状況	十分満足できる状況	
一	1	教材文を読み、学習の見通しをもつことができる。	関・意・態(発表)	「モルモットのもこ」のカードや例文を読み、学校にいる生き物や学校でつけた物について家の人に文章で伝える活動であることを知る。	「モルモットのもこ」のカードや例文を読み、家の人に伝えたい物を考えながら、文章を書く活動に意欲をもつ。	生活科でうさぎや虫の世話をした様子を話させることで、家の人に伝えたいという思いをもたせる。
	2	校舎内や校庭を探検し、知らせたいものを見つけたり確かめたりすることができる。	関・意・態(観察)	動物や虫など、知らせたい物を見つける。	動物や虫など、知らせたい物を見つけ、家の人に伝えたいことを積極的に考えている。	生活科でうさぎをだいたり秋の虫をみつけたりした学習を思い起こさせ、一番気に入っている生き物に決めさせる。

		きる。				
二	3	知らせたい物の絵を「見つけたカード」に丁寧に描くことができる。	書く (カード)	実物を見ながら、色や形をよく見て丁寧に絵を描くことができる。	実物を見ながら絵を丁寧に描き、伝えたいことと対話をしながら進めている。	形や特徴がはっきりと描かれていないときには、教師が質問しながら、気づかなかったことやはっきりしなかったことに目を向けさせる。
	4	見つけたことをカードに書き込むことができる。 <資料 >	書く (カード)	色・形・大きさなどについてカードに書き込むことができる。	色・形・大きさ・動き・さわった感じなどの多様な観点でカードに書き込むことができる。	色・形・大きさについて教師が質問しながらカードに言葉を書き込ませる。大きさの観点では、自分の体の部分を使って表現させる。形では、何に似ているかを考えさせる。
三	⑤	書き込みを「文」にすることができる。	書く (原稿用紙)	「～は、～です。」の型で3つの文を書くことができる。	多様な観点から主語と述語が対応した文を4つ書くことができる。	書き込みを指で押さえながら、主語を明確にさせる。口頭で文に直させた後、文を書かせる。
	6	書き出しを考え、題名をつけることができる <資料 >	書く (原稿用紙)	教科書の例文にならない、「学校に～がいます。」の型にそって、書き出しを書くことができる。	型以外の表現を考えて書き出しを書くことができる。	教科書の例文のはじめの一文を音読させる。「学校に～がいます。」の言い方を口頭で表現させた後に、書き出しを書かせる。
	7	丁寧に清書をすることができる。 <資料 >	書く (原稿用紙)	ますをはみ出すことなく整った文字、正しい表記で清書することができる。	家の人に呼んでもらうことを意識しながら丁寧に清書することができる。	ますからはみ出さないように助言する。ますを空けるときには、どこに書けばよいかを指で押さえたり鉛筆で薄く印を付けたりにして教える。
	8	友達の書いた文章を聞き感想を發表することができる。	読む・聞く (発表)	発表を聞いてはじめて知ったことを感想で話すことができる。	友達の文章のよさを相手に伝えることができる。	友達の作文を聞き終わった後で、今まで知らなかったことがなかったかどうか尋ねる。

5 本時の学習

(1) 目標

見つけたカードの書き込みを見ながら、主語と述語を対応させた文を書くことができる。

(2) 準備・資料

見つけたカード(拡大図), 作文用黒板, 掲示用短冊, 原稿用紙

(3) 展開

Ⓐ 十分満足できる児童への手立て Ⓒ 努力を要する児童への手立て ⑩ 評価の観点

学習内容及び活動	指導上の留意点及び評価活動
<p>1 本時の課題を確認する。</p> <div data-bbox="177 383 655 488" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"><p>見つけたカードを見ながら，わかりやすいぶんをかきましょう。</p></div> <p>2 掲示されたカードの書き込みを，口頭で文に直す。</p> <p>3 見つけたカードの書き込みを，口頭で文に直す。 (1) 例示を聞く。 (2) 隣の友達に話す。 (3) 教師に話す。</p> <p>4 原稿用紙に文章を書く。 (1) 書き方を知る。 助詞「は」の表記 文末に句点をつける。 主語の次に読点をつける。 (2) 原稿用紙に書く。 (3) 見なおしをする。</p> <p>5 本時の学習を振り返り，次時の学習内容を確認する。</p>	<p>課題を板書し，一斉音読させる。 家の人に分かるように文を書こうとする意欲を持たせる。 見つけたカードの拡大図を掲示する。 述語だけの文を提示し，述語だけでは分かりにくいことに気づかせる。 拡大図の中の書き込みを，主語と述語の整った文に直させ，口頭で発表させる。 残りの書き込みも口頭で直させる。</p> <p>教師ともう一人の児童で，対話の仕方の例を演じる。 二人一組になり書き込みカードを見ながら，お互いに口頭作文をする。</p> <p>Ⓒ 主語が言えない場合，書き込みカードに指を置かせ，「これは何か。」の問いを出す。教師が文を例示し，後に続けて復唱させる。 教師の前で一人ずつ口頭作文をさせる。</p> <p>Ⓒ 文がすぐに言えない場合，主語の言葉だけ教師が言って聞かせる。</p> <p>Ⓐ 読点の位置で間を置いて話すよう助言する。</p> <div data-bbox="715 1122 1433 1227" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"><p>⑩ 書き込みカードを見ながら，「～は，～です。」の話型で文を話しているか。 (観察)</p></div> <p>助詞「は」を「わ」で表記し，間違いに気づかせる。 句点をつけない文を書き，句点の抜けに気づかせる。 読点をつけない文を書き，読点の抜けに気づかせる。 文に直すときの注意点を短冊カードで掲示する。</p> <p>Ⓐ 文字をますいばいに書けていることを賞賛する。 Ⓒ 助詞，読点，句点の間違いがあつた場合，板書された文をもとに，直す部分に気づくよう助言する。 Ⓐ 書き終わったら，自分の書いた文章を小さい声で読ませ，間違いがないかどうか見直しをさせる。 見直しコーナーで助詞，読点，句点の間違いや漏れがないかを確認させる。 教師の横で，書いた文章を人差し指で追いながら読ませる。 間違いがなかった児童は，書き出しの文を考えさせる。</p> <div data-bbox="715 1821 1433 1926" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"><p>⑩ 助詞「は」，読点，句点を正しく表記し，主語と述語の整った文を書いているか。 (原稿用紙)</p></div> <p>何について知らせるのかをはじめに書くと，分かりやすい文章になることを話し，書き出しと題名をつけ足すことを伝える。</p>

< 資料 >

見つけたカード



< 資料 >

下書き用原稿用紙

⑤	④	③	②	①	←はじめ→
です。	ます。		いで。	じです。	ます。
ひれのうしらは、	かべでくちをパフ。	ぬは、まるい	大きさは、手より	からだは、くろと	がっ
まるい			ちい	おれん	こつに、ふれ
					こが

< 資料 >

清書用原稿用紙

で	ま		い	ま	
すひ	すか	ぬ	で	か	す
れ。	べ	は	す	ら	っ
の	で	、	だ		こ
う	く	ま	は		う
し	ち	る	、		に
ち	を	い	手	よ	ふ
は	パ	で	り	れ	
、	ク	す	ち	こ	
ま	パ		い	が	
る	ク		い	い	
い	し		さ		